



38 澗川惣助

《實字無双図額》

一面

明治二十七年（八九四）

七宝

四三・〇×七五・〇

内国博の開催された明治十年から三十六年の期間は、近代七宝の技術が飛躍的に発展した過程にちょうど当てはまる。まだ文様に硬さのみられる第一回の並河靖之の作品（作品番号1）に始まり、第四回から第五回の時期にあたる、二十年代後半から三十年代にかけて最盛期を迎える。緻密さや色数の増す有線七宝に対し、輪郭となる金属線をとりのぞくことで、にじみやぼかしなど絵画的な表現を生みだそうとしたのが、澗川惣助がはじめた無線七宝であった。それまでの七宝は器物を装飾するための技術であったが、澗川は従来の作品にこだわることなく、西洋絵画風に額面での製作にふみきった。《實字無双図額》は、当初、第四回内国博に出品するため製作されたものであったが、日清戦争に際し広島大本営に駐留されていた明治天皇へ献上されることとなった（帝室技藝員 澗川惣助氏、「京都美術協会雑誌」第五十六号）。富士にかかる墨をにじませたような雲の表現は、澗川の無線七宝の真骨頂である。

澗川惣助（一八四七～一九一〇）は下総千葉県に生まれ、東京で陶磁器問屋などを営むかたわら、尾張七宝の塚本貝助から七宝技術を伝授された。第二回内国博では「彩画磁器」で有功賞牌二等を受賞した。その後、省線七宝の発明や、七宝会社の東京工場の運営にたずさわると、七宝改良に邁進した。第三回内国博では《七宝画史屏風》（東京国立博物館所蔵）を出品して名誉賞、第四回は「七宝春暁山桜額」により妙技一等賞、第五回は「無線七宝雲月図額」により一等賞を受賞して、七宝家として一世を風靡、明治二十九年に帝室技芸員に任命された。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

内国勸業博覧会 ― 明治美術の幕開け

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 57

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年四月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections